

国際親善総合病院（横浜市泉区）

山田裕道

当院の正式名称は表題の通りですが、略称は国際親善、あるいは親善病院です。地域の方には単に親善とも呼ばれているようで、患者さんには「かかりつけ医からシンゼンに行けといわれた」とか「いつもシンゼンさんにお世話になっている」などと表現する人がいます。こういわれると私などは『神の前に出てどうする?』『いや交流試合か?』『それともユニセフの大使か』などと戸惑ってしまいます。

各種学会の懇親会などでよく「そちらの病院の経営母体はどういう団体ですか?」と聞かれます。神皮読者の先生方の中にも同じ質問があるかと思えます。「親善福祉協会という名の社会福祉法人が経営しています。従って公立ではなく私立の病院です。社会福祉法人は収益に対し非課税で、黒字は職員に還元するといわれていますが、未だかつてそんな目にあったことはありません。病院は赤字続きです（そういう仕組みになっているらしい?）。ちなみに当法人は病院のほかに特別養護老人ホームも経営しています。法人の理事長は弁護士です」と答えています。

次に横浜市の郊外の住宅街の中にある病院がなぜ国際親善などという仰々しい名称か考察してみましよう。それは当院の歴史に隠されています。当

院の起源は慶応3年（1867）に欧米人の委員会が中区山手町（外国人墓地の南側）に設立した「THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITAL」です（写真1）。病院敷地内には11人の欧米人シスターを擁する修道院もあったそうです。時が流れ昭和19年、帝国政府は「THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITAL」を敵性財産としてこれを接収し、日本人を中心とする委員会（但し委員長はスイス人）に無償譲渡し、名称も「横浜一般病院」となりました。それもつかの間、今度は帝国海軍が横須賀海軍病院分院として使うことになり、かわりに中区相生町の関東病院を買収し移転しました。戦争が終わり昭和21年、相生町の「横浜一般病院」は新しく「財



写真1 国際親善総合病院の前身「THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITAL」の全景。明治年間の撮影と思われる



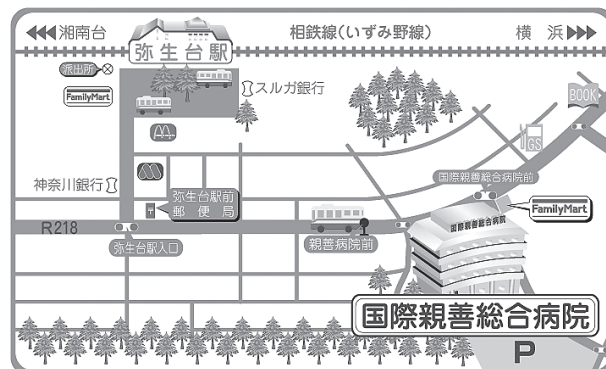
写真2 中区相生町の国際親善総合病院



写真3 泉区西が岡の現在の病院

団法人「国際親善病院」(写真2)として再出発します。その後、財団法人が社会福祉法人に、国際親善病院が国際親善総合病院に変わります。そして平成2年5月、手狭になった相生町から当時は宅地開発中であった泉区西が岡に移転し現在に至ります(写真3)。皮膚科の診療はこの時、順天堂大学から常勤として2名の医師が派遣されて始まりました。(その後ごたぶんにもれず、非常勤は派遣切りの憂き目にあいましたが、常勤医は幸いにも切られておりません)。一方、山手の病院(横須賀海軍病院分院)はその後どうなったのでしょうか。昭和20年8月進駐軍に接收され、欧米人の運営に復帰します。日本政府が取り上げたものですから当然の結果でしょう。昭和21年7月「THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITAL」と元の名称にもどり、昭和25年「THE BLUFF HOSPITAL」と改称し現在に至りますが、戦後は当院との関係は全く途絶えてしまい現在の詳細はわかりません。

当院が国際親善を名乗ったのは昭和21年ですが、新規命名の由来については何の説明も伝えられていません。そこで私の全く個人的な憶測ですが、当時の法人役員たちが、帝国政府の命令とはいえ外国籍の資産を無償で譲渡された過去を清算し、慶応3年の欧米人による病院設立の趣旨を継承し、戦後は戦



病院地図(弥生台駅から徒歩7分)

勝国を含めて諸外国と健全な交流をはかり、親善を深める姿勢を表明したのではないかと考えます。病院の所在が横浜港に近いということも国際親善という命名を意識させたことと思いますし、またGHQに対するアピールもあったのかも知れません。

さて現在の病院は病床数300床、平均稼働率76.3%、1日平均外来患者数682名、常勤医師数64名、患者紹介率55.6%の横浜市西部医療圏の地域中核・急性期病院です。地域の医療機関との連携を密にし、患者紹介・逆紹介システムを確立してきました。厚生労働省臨床研修指定病院で、当院採用初期研修医には2週間の皮膚科研修が課せられています。平成10年には財団法人日本医療機能評価機構から神奈川県内第一号の機能評価の認定を受け、さらに平成20年には新評価体系version.5として認定を更新しました。機能評価受審の目的は、われわれが行っている医療が良質で、親切で、信頼されるものであることをみていただく、それがひいては患者のためになる、ということで出発します。しかし審査員の訪問日が近くなると職員の多くがぴりぴりしてくるとともに認定してもらうこと、そのものが目的に変わってきます。すなわちこういうことをしていると認定が通らないからやめよう、こういうことをすれば認定が通るからすぐ始めよう、中には「患者のため」とは全く関係ない、異様なことまでが、まかり通ります。私などは「ちょっと違うんじゃないか」

皮膚科外来診療担当表

受付時間	月	火	水	木	金	土
午前 8:30~11:00	山田 渡辺	山田 渡辺	渡辺	山田 渡辺	山田 東竹	交代診療 (新患) 11:00まで
午後 検査・手術	手術日 レーザー-外来 (予約)	手術日 レーザー-外来 (予約)	ピーリング*外来 (予約)	手術日 レーザー-外来 (予約)	レーザー-外来 (予約)	—

といいますが、小さい声は吹き消されてしまいます。

病院の話ばかりで皮膚科の紹介スペースがなくなっていました。もしよろしかったらホームページ (URL <http://shinzen.jp>) をご覧戴ければ幸いです。併せて患者さん紹介も宜しくお願い申し上げます。



皮膚科スタッフ (当科自慢のロングパルスアレキサンドライトレーザーを前にして)
左から大原直子看護師、渡辺裕美子医長、筆者 山田裕道、西島直美看護師

社会保険横浜中央病院 (横浜市中区)

羽尾貴子

当院は日本最大級の中華街とオシャレな元町、ロマンチックな山下公園、更に日本三大ドヤ街のひとつに数えられる寿町に隣接し、日々多種多様な方々が受診される横浜市中心部の中核病院です。

創設は昭和23年、当時の厚生省が日本造船株式会社付属山下病院を買収し、健康保険横浜病院としてスタートしました。近く行われる社会保険庁の改革に伴い昨年10月にRFO (独立行政法人、年金・健康保険福祉施設整理機構) に移管され、現在、社団法人全国社会保険協会連合会・社会保険横浜中央病院として運営されています。

当院は創設当初から日本大学の関連病院であり、各科共教授クラスが診療にあたったといわれています。ただ、こちらも新たに始まった研修医制度に伴う医局制度の改変を受けて、日本大学だけでは医師確保が困難になり、他大学の出身医師も増えてきています。

皮膚科は病院創設時には皮膚泌尿器科としてスタートし、昭和37年7月に泌尿器科と分科して現在に至っています。歴代の部長は日大皮膚科学教室出身者が就任しております。初代は神皮六六会で今も

ご活躍中の林輝信先生で、その後、寺尾尚先生 (故人)、藤澤重樹先生らが長く勤められた後、昭和63年7月より鎌田英明部長がその任にあたっております。鎌田部長は平成18年4月より副院長を兼務しており、ご存知のように神奈川県皮膚科医会幹事長、横浜市皮膚科医会副会長、日臨皮常任理事、日皮東京支部代議員、社会保険支払い基金の審査委員、さらに昨年からは日大医学部皮膚科学教室の同窓会長に選任されるなど、多方面から引っ張りだこで、まさに八面六臂の活躍ぶりなのですが、驚く事に、外来、病棟の診療、手術などのDUTYをそれらの役職に就任される前と同じようにさらりとこなしています。

現在、鎌田部長のもと、筆者が医長として平成12年から勤め、医員として日大から出張者が1年交代で派遣されます。現在は三橋真理子先生が赴任しています。若い医局員を指導すると共に、逆に大学からの新しい知見を入れるよい機会になっています。

横中の1日は、朝の病棟回診が終わると、他の病院では経験できない「寿町臭」とでもいうか、ある種独特のすえた匂いの漂う廊下を通り抜け診察室に向かうところから始まります。外来の3つのブース

と処置室はフル稼働で、野戦病院のような午前中の外来が終わると地下の病院食堂で昼食です。午後の外来が1時から始まるため、中華街を横目に眺めながらも中華街でのランチはお預けです。午後は一般診療の傍ら、外来でのオペやQスイッチレーザー、ピーリングなどの処置があり、病棟の回診、他科からの往診を終えて一段落ついた頃には日が暮れているような毎日です。

外来患者さんは通常約100名、入院患者さんは帯状疱疹、蜂窩織炎、皮膚潰瘍、薬疹、重症アトピー、手術患者さんなどで常時5～6名、外来でのオペは年間平均300件、オペ室でのオペは年間20例ほどです。

当院では当科だけでは治療に限界のある患者さんも多く、その方々に対しては他科と連携をとりながら治療にあたっています。コンパクトな病院のため、他科の医師も気軽に相談にのっていただけます（私たちが依頼を受けるケースも少なくないのですが……）。

糖尿病や腎疾患のコントロールについてだけでなく、ここ数年コメディカルも含めた当院全体で取り組むフットケアチームの活動が始まり、例えば下肢の慢性閉塞性動脈硬化症に生じた足の疼痛難治性潰瘍や壊疽に対しては、ABI、SPPなどの血流の評価後に、循環器科において迅速に経表皮動脈拡張術などの血行改善を行うというシステムが作られてきています。これにより難治性潰瘍が急速に改善することもしばしば経験します。侵襲の程度によっては整形外科とも協力してデブリードマンを行ったり、当科での処置により切断範囲の最小化を図ったり、術後の処置を担ったりする事もあります。

一方、最近頭を悩ます事として、ご家庭で介護されていた高齢者の褥瘡が悪化して当科を受診し、ご家族が入院を希望されるというケースです。褥瘡対

策チームと協力したり栄養状態が悪い場合は、全身状態の管理が必要なため、内科と連携して治療にあたるのですが、急性期病院の宿命で長期在院は困難であり、状態が改善しても、今度はご家族が引き取れないというケースが少なくありません。そこから転院先を見つけるため、当院の医療福祉相談室のスタッフは必死になって諸処をあたってくれますが、なかなか受け入れ先がありません。核家族化、老老介護の現状から家族の受け入れが難しい場合もあり、医療制度そのものの見直しの必要性を感じます。

近隣の開業の先生方ならびに横浜では数少ない同窓の先輩方からのご紹介のおかげで当科の紹介率は新患の20%を占めます。今後も日々の診療に対して真摯に取り組み、この地域に愛される市中病院の皮膚科として研鑽を積んでいかなければならないと思う今日この頃です。



外来スタッフと〈前列：鎌田英明、後列左から2人目：羽尾貴子（筆者）、同右端：三橋真理子〉

横須賀共済病院は、三浦半島のほぼ中央に位置し、交通の便も京急横須賀中央駅から徒歩約8分と至便です。病院の規模も735床あり、第三次救命救急センターを含め全科が揃っており、三浦半島全域の基幹病院としての役割を担っています。

病院の始まりは古く、1906年（明治39年）に海軍職工共済会の会員並びに家族の診療所として開設され、1909年に病院になりました。病院も徐々に大きくなっていき、また三浦半島全域をカバーすべく多数の分院や診療所を併設してきました。主だった分院は、追浜分院（現 横浜南共済病院）、衣笠分院（現 衣笠病院）、油壺分院（現 油壺ホテル）、長浦分院（旧 横須賀北部病院、現 当院分院）、野比分院（現 国立久里浜病院）などで、現在も地域の主要な病院や施設として残っています。昨年、創立100周年記念祝賀会が盛大に開催され、今後の更なる飛躍の誓いを新たにしました。また、今年度4月1日から横須賀北部共済病院を当院の分院とすることになり、本院を急性期対応病院として1対7の看護体制や医師の増員補強を行い、分院は縮小して慢性疾病対応病院（142床）とするなどの役割分担をすることにより、更に効率の良い医療に寄与できる様になりました。

皮膚科は、どの施設でもそうであったように、1937年（昭和12年）に皮膚・泌尿器科として新設されました。皮膚科が泌尿器科と分離独立したのは1968年（昭和43年）8月になってからです。初代皮膚科医長（後に部長）として横浜市立大学皮膚科学教室から澤泉健二郎先生が赴任されましたが、当初は1人医長で、大変苦勞された由伺いました。1982年（昭和57年）からようやく2人体制になり、手術や入院も徐々に増えてきた様です。筆者も、市大皮膚科のローテートとして2年間勤務しました。平成2年から筆者が引き継ぐことになり、その後は皆様方のご協力もあり人員も徐々に増えて、現在は本院は5人体制、分院も1人の計6人で毎日の診療に当たっています。

本院の日常の診察は、午前中は基本的に予約制の一般診療、午後は手術や光線外来、学童外来、病棟往診などです。外来受診人数は約130名/日、入院は約12名/日位です。3年前から電子カルテ化され、便利な反面扱い難い面もあって苦勞しています。病院の性質上重症や難治の患者が多く、外来患者の約4割が何らかの処置や切開を必要とする方で占められています。外来も入院も、基本的には全ての皮膚疾患を診療することを心掛けています。最近、特に皮膚悪性腫瘍（特に悪性黒色腫）が増えている様な印象が有ります。手術の他に何種類かの化学療法も併用しています。また、TENや水疱症なども多く、ステロイドパルス療法や血漿交換も何回か行っています。糖尿病性壊疽や閉塞性動脈硬化症など、血管障害による皮膚潰瘍も増えており、PTAの施行例も増加しています。小手術も含めると手術件数は年500例を超えていて、各種のレーザー療法やケミカルピーリングも10例/週前後行っています。他にも手足用のPUVAやnB-UVBなどいろいろな設備を整えており、毎日忙しく過ごしています。帰宅も深夜になることもありますが、若い先生たちの協力で何とか乗り越えられています。感謝！

まだまだ実力不足を痛感していますので、今後も先生方のお力をお借りすることが多いと思いますが、何卒宜しく御指導の程お願い致します。



外来スタッフ一同